

夜空の下で

090 松本秀峰中等教育学校 鉄道部

鈍い金属音が響きわたり、無数のカメラやスマホを構えた人々に見守られ、シャッターは降りた。

ここで今日、また一つの時代が幕を下ろした。

人々の心も、その音と共に沈み込んでいくかのようだった。

一体、これで何度目だろうか。かつて声が響き、賑わい、栄華を誇った場所が、こうして静まり返るのは。

彼が奏でるシャッターの音は、明日への希望を告げる始まりの音だった。しかし、今日はただ、終わりを告げる音に他ならなかった。

彼はもう、動かない。

やがて、感謝の声も、シャッターを切る音も静まり返り、ただバスが通り過ぎていく音が聞こえるだけだった。

私は夜空を見上げた。暗闇に浮かぶ月のように、看板の光が私を照らしていた。

私は歩き続ける。

再び人々の賑わいが、ビルの光が、シャッターの音が戻る、その時まで。

私は誓った。彼の栄華を決して忘れない、と。

私は動かない。この場所に再びあの光が灯ることを信じて。動かなくなった彼の前から。

